【研究ノート】

授業研究と横須賀薫

―学校現場からの教育改革：想起データ分析（２）―

（平成 27 年 8 月 30 日受付，平成 27 年 10 月 20 日受理）

Lesson Study and Kaoru Yokosuka
Educational Reform Based on Schools : Through Review of Effective Cases (2)

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科
渡邉　規矩郎
WATANABE Kikuro
Department of Education for Human Growth
Faculty of Education for Human Growth

キーワード：大田尭，生活綴り方，稲垣忠彦，宮城教育大学，林竹二，斎藤喜博，教授学研究，教員養成改革
Key words： Takashi Ohta, Seikatsu Tsuzurikata(Pupils' writings about their daily life), Tadahiko Inagaki, Miyagi University of Education, Takeji Hayashi, Kihaku Saito, Pedagogical Research, the pre-service teacher training reform

Ⅰ　はじめに―研究の概要

１．教育実践の改革をめざす流れと教育主張

教育のあり方を変革し新しい方向づけをめざす学習理論と実践は少なくない。特に近年、「教育爆発時代」といわれた 1970 年代から 1980 年代にかけては、さまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられた。これらは教育研究集団を形成して教育実践研究を繰り広げ、時の流れの中で消長があるものの、現在の教育実践にも大きな影響を及ぼしている。その代表的なものを取り上げ、その問題意識と提唱されている改革策の概要を検討することにより、今日の学校教育、教育全般の問題点の克服をめざすことができると考える。

独特の教育実践研究を積み上げた教育研究集団は閉鎖集団になりがちであるが、それぞれが持つ学習理論や研究成果を、共通の広い土俵の上に上げて比較検討し、それぞれが示唆するところをわが国の教育界の共通財産としていくことが必要である。現在の学校教育のあり方の何が問題であり、どのような方向へ解決しうるかについて、それぞれの学習理論や実践あるいは教育集団の取り組みが示唆するものは大きいはずである。それらを分析、その成果をもとに、現代における教育改革の課題を明らかにし、改革への具体的な提案

を行うことを本研究ではめざしている。

筆者は、1966年以来、教育ジャーナリストとして、教育界に眼を注ぎ、教師教育、教員の資質向上、教育研究のあり方に関心を寄せてきた。特に1970年代から1980年代は、第一線の教育記者として、本研究で聞き取り調査を行う研究者、実践者に直接・間接に接した体験を持つ。従って本研究は、研究者自身の戦後教育実践研究史の追体験、振り返りでもある。先達の学校改革への夢と志を研究し、後に続く現場の実践者にこの「戦後日本の教育遺産」を継承してもらいたいと考える。

教育界においては、絶え間なく、教育の本来のあり方を問い直し、現実の学校教育をどのように改革すればそれに近づけることができるか、ということについての学習理論や試みが続けられてきた。

戦後は、戦前・戦中の教育を全否定、当時のアメリカの教育思潮の影響の下に、いわゆる「戦後新教育」が展開された。そして、1970年代から1980年代の「教育爆発時代」にさまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられていった。しかしその後、教育界では、国の大きな教育改革の流れはあるものの、学校をベースにした学習理論や実践的試みは低調になっている。

２．学校改革の先達の想起データ発表の意義

教育実践の改革をめざす流れについて、梶田叡一は、1970年代の「現代教育主張の総点検」を行っている（『総合教育技術』小学館 1978年4月～1979年3月）。梶田は、明治以来の教育主張の歴史的展開と現代における教育主張の全体状況を概観したあと、「学び方学習」「極地方式」「範例学習」「発見学習」「仮説実験授業」「主体的学習」「バズ学習」「集団学習」「完全習得学習」「教育工学」を取り上げ、それぞれの教育主張とその実際を検討している。本研究では、梶田の研究成果をさらに発展させたいと考え、さしあたり、1970年代から80年代にかけて出現した学習理論の提唱者と学校現場における実践者の双方の代表的人物に聞き取り調査を行う。

学校改革の先達の具体的な提案を含む主張は、学校現場が閉塞状況にあり、教育研究が低調になっている昨今にあって、学校教育にのみとどまらず、教育全般の改革にむけての課題を提起し、示唆を与えてくれる。

学校改革の研究者と実践者の想起データは、一定の聞き取り調査後において分析し、学校改革に関する課題や具体的な改善への方法論を明らかにしていく予定であり、本研究の意義は「学校現場からの教育改革：想起データ分析(1) ブルーム理論と梶田叡一」(奈良学園大学紀要第2集　2015,3.10) で記した通りである。

近年、学校教育をベースにした学習理論や実践的試みは低調になっている。学校現場では、ハウツーを求め、場あたり的な指導に終始しているきらいがある。本研究が学校をベースにしたカリキュラム開発に向けた授業研究、実践研究の興隆に資することになれば、学力の向上は言うまでもなく、これからの新たな学校文化、教育文化の創造に寄与することができると考える。

今までに10数人の聞き取り調査(過去に実施を含む) を行い、想起データとしているが、この想起データそのままでも、貴重なものである。学校改革の研究者と実践者のナマの声は、それ自体が今後、学校改革の歴史及びそれを牽引した先達を研究していく上の素材を提供する意味でも寄与するであろう。

とりあえず、聞き取り調査を終えた想起データを順次発表して、この分野の研究に供したい。

Ⅱ　授業研究と学校改革：横須賀薫からの聞き取り

横須賀薫は1937年1月、大阪市に生まれ横浜市で育つ。東京大学教育学部で学び、同大学院で日本教育実践史を専攻、1967年に博士課程を単位取得退学。1968年から宮城教育大学に勤務して教育学を担当。2000年8月より宮城教育大学学長を務め、2006年7月末に任期満了で退任。2007年より十文字学園女子大学特任教授･学事顧問、同大学学長代行を経て、2011年4月より学長。担当講義科目は「教育学概論」、「教育人間学」。

著書に「授業の深さをつくるもの」(教育出版)、「児童観の展開」(久山社) .「斎藤喜博　人と仕事」(国土社)、「中国点描　くらしと教育」(本の森)、「山に在りて　学長六年の記」(本の森)、「教員養成　これまでこれから」(ジアース教育新社) .「新版教師養成教育の探究」(春風社) などがある。

横須賀薫からの聞き取りは、2009(平成21)年12月4日、十文字学園女子大学で実施した。以下は、その要旨である。

渡邉　先生が教育研究に入られたあたりからまずお

話しいただきたいと思います。そして教授学研究の会を引き継いでやっておられること、さらになぜ斎藤喜博なのかということ、もう一つ今でも授業をなさっていることの意義についてお伺いしたいと思います。

1．東大の大田ゼミで研究し宮教大へ

横須賀　振り返ると、かなり私の人生の重要な部分になるので、そろそろ自分でも振り返って書いておかなくてはというような気にはなっているところです。

私は東大の教養学部、駒場に入ったのが昭和31年ですが、教育学部に進学したのが33年、1958年です。いわゆる駒場に入って学生運動、あの頃は自治会活動というんですが、それに加わったりしていたんですが、どうしても政治というものにストレートに参加する気にはなれなくて、むしろ将来の子どもたちの教育の方の関心がずっと出てきたものだから、教育学部に行こうというふうに、割と早く決めていました。

教育学部に行くならば大田堯さんのゼミに入りたいと最初から思っていた。あの頃は大田さんはまだ助教授時代で、海後宗臣さんとか勝田守一さんとか、ああいう人たちの方が存在は大きかったと思いますが、私は大田さんのところに行って、教育学でも実践的な教育学をやりたいというふうに思っておりましたし、場合によったら学校の現場の教員になろうという気もかなり強かったんですが、とれる免許が社会科だけだったし、私は横浜育ちなので、神奈川県の川崎市の採用試験を受けて受かったことは受かったんだけれど、どこからも話がなくて、あれも自分で運動すれば、いまと違って校長が割に採用権をもっていた時代みたいなので、あったんでしょうが、まあ大学院でも行こうという気の方が強かったものだから、そのまま修士課程に行った。

それで学部の時から修士課程にかけて、大田さんのゼミというのは学校につれていってくれて、そして教育調査をやる、そしてよく浦和のいまは埼玉大がきている大久保なんていうところへ行ったり、千葉に行ったりして、それは極めて実践的だったんだけれど、学生とか大学院生で実践的な教育研究をやるというのは、まだその頃はほとんどありませんでしたからね。結局、大田さんと一緒に生活綴り方の研究をする、だから当然、歴史研究ということになりますよね。

だから学校現場に入りたいと思ったけど、まあ入れなかったし、それほど強い意思もなかったから大学院に行って、それで大田さんのところだから生活綴り方をやるという格好で、あの頃は大田さんのところで民間教育史料研究会という、まだあまり過去の、特に昭和期の教育運動の研究とか、そういうのはできてなかったから、当時の人がまだ存命な人がたくさんいたから、会って、その資料を集めるというようなことを、中内敏夫さんが先輩でいて、その下でやっていたというようなことです。

博士課程では大体そんなようなことをやって、博士論文なんていう気は全然起きなくて、そうしているうちに宮教大に採用になって、それが昭和43年ですから、1968年になりますね。その頃は結局生活綴り方も、今度は現場で実際にやっている人とつきあうということで、宮城県の生活綴り方教師の人達とサークルをつくったりしたんですが、私の先輩が中内敏夫さんともう一人稲垣忠彦さんで、中内さんよりはちょっと下ぐらいの大学院の先輩で、なぜか私を可愛がってくれていたんですが、稲垣さんが先に東北大の助手で赴任して、それから宮城教育大は昭和40年、1965年にできるんですが、その時に東北大の教育学部、いわゆる教育科学の方に助手でいた稲垣さんが宮教大の助教授で移るんですよね。

これも当時としては変則的な、教育科学部というのがまあ追い出したような格好になっているわけですが、こっちの教員養成課程の方に移ったということだから、当時は変則的だったと思うのです。そこで稲垣さんは2年いただけで、そして東大の学校教育の方の助教授で戻るんですね。それで私は今度宮教大の方に入れるということで、稲垣さんが大分運動したみたいで、それで私が実現して行ったという格好だったんですが。

だから稲垣さんが宮城県の学校現場の教員たちと実践的な研究をやっていた人たちを受け継ぐような格好だったんですね。あの頃は、その後もそうだけど、教員組合というのがいい働きを随分していた時代ですから、実践検討会というサークルをつくっていたんですね。これは組合の教文部の仕事だったんですが、誰かが授業を提供して、それを組合系の人だということになるんでしょうけど、集まって検討するという、まあ授業研究といってもよかったんでしょうけど、実践検討会というふうに呼ばれていましたね。それに自然と加わるようになっていた。

そのうちに宮教大の学生紛争があって、まあそれ自体は大したことはなかったんですが、学生紛争が起きて、学長が辞任して、そして選挙になって、初めて選挙の学長が出て、それが林竹二さんでした。私はもちろん知らなかったし、林さんは教育哲学というより哲

学の人ですよね。そういう人が来て、だけどちょっと学長のイメージと随分違っていて、すごく私は引き立てられたというか、利用されたというのか、活用されたというのか、可愛がってもらって、だから本当にいまから思えば学長親衛隊みたいな、まだ30代の前半でしたからね。

２．生活綴り方を離れ授業学研究へ

そうしているうちに、稲垣さんから、斎藤喜博さんを宮教大へ教員で呼んでくれというんでしょうか、あるいは呼べというんでしょうか、そういうことを頼まれた。ちょっと前後しますが、林さんと斎藤喜博さんが会うのはその前後で、そんなことがいろんな形で起きてきて、それで最初は教授学という科目をつくって、斎藤喜博さんを呼んだのが昭和47年（1972年）です。

この時は非常勤講師だったんですが、それで私がお世話をするというようなことになった。そうしているうちに授業分析センターというのができた。これは教育工学センターで申請していたのを、宮教大にはふさわしくないというので、授業分析センターをつくるというのが、これは林竹二と理科教育の高橋金三郎さんの主導で、それで私と。だから林竹二、高橋金三郎、横須賀薫というのがその頃にできていたラインだった。そして授業分析センターの初代の教授に斎藤さんを呼ぼうということになって、ちょっと紆余曲折ありましたが、斎藤さんが専任で来ることになった。

そして結局、斎藤喜博さんはすぐに定年年齢に達したんだけど、その後も学生のために通ってくれた。だから非常勤講師になってから、プラスαの専任、学生の指導を大体５年ぐらいやってくれていた。それで高橋金三郎さんは呼んでおきながら引いちゃうんですよね。あの人は本当に変わった性格の人で、それで私が全面的に斎藤喜博さんを迎えて、学生との間を結びつける、あるいは現場の研究会を開くというふうになっていたということがあります。

その前にいうと、私は生活綴り方の果たした歴史的役割というのは非常に大きいと思うけど、戦後の新しい時代になって、やっぱり生活綴り方なんだろうか、

という疑問をものすごく感じ始めていて、ちょうどその実践検討会とか、斎藤喜博さんにくっついて授業を見たり、授業の結果を教師たちが持ち寄るのを指導したりするという、授業研究ですよね、まあ斎藤喜博さんの場合は授業研究というよりは授業指導に非常に近いというか、授業指導ですよね。この辺が後で分れてくる問題になるんですが、やっぱり学校の仕事って授業なんじゃないかなと思うようになってきました。

その理由の一つは、教員養成大学で教えて学生が卒業していきますね、そして現場に入っていく。そこでやっぱり最初のうちは綴り方というか、作文の指導でやるように私も指導して、学生時代も指導して、卒業してからもそれを指導していたけど、やっぱり彼らの仕事を見ていると、むしろ全面的に授業の方が重要な位置を占めていますよね。授業でつまずいてはやっぱりやっていけないし、作文で乗り越えられるかというと、それは違うなあというふうな気が非常に強くなってきた。

そういう気持ちになってきたのと、斎藤喜博さんの授業研究というか、授業実践等を身近に見たり一緒にやったりすることがちょうど重なって、それが結局、私に綴り方離れを起こすきっかけになったし、そうなってくると実践検討会の授業の研究の仕方というのも、本当に授業に即してやっているというよりは、やっぱり一種のイデオロギーのようなものの方が強くなって、私はやっぱり非常に不満感をもつようになって、さっき言った実践検討会の人たちとも離れてしまって、やや自分で授業研究の人たちを組織するというのか、そういう方に移ってきたというのが昭和40年代の後半だったような記憶があります。

３．斎藤喜博と教授学研究の会

斎藤喜博さんは、教育科学研究会を舞台に授業研究というか、教授学研究をやろうとしてずっと来たわけだけど、そして教育科学研究会の体質と完全に分れてしまうわけですね。教授学部会というのをつくったけど、結局、教科研の主流の人たちからは追い出されるような格好で離れて、教授学研究の会というのをつくるという形になります。この頃には、私も授業研究を多くやりたい、授業研究でやるのがいいという気持ちがずっと強くなっていました。

斎藤喜博さんは大体何をやっていたかというと、全国の学校に行って、校長が呼んだ、招いた学校に入って、それで年に何回か直接指導して、そして最後に学校公開研究会を開くというのが一つの仕事で、授業をつくるというのと、それから合唱とか、そういう身体表現を入れた表現活動をする、それを公開するというのが一番大きなものかな。それは本当に北海道から九州の果てまで、正確には数えてないけど５校か６校やっていたんじゃないですかね。それに東大を中心にする研究者たちが加わって、まあ斎藤喜博さんにして

みれば、自分の指導をよく見ておけという気持ちだったんだと思うんですけどね。

それと斎藤喜博さんは、第３日曜の会と言って、自宅に月に１回実践者を招いて、美術の作品とか、そういう授業の結果を持ち寄らせて、それを批評して指導するというのと、それから仙台では第４土曜の会と言ってましたけど、やっぱり同じようなことをやっていたということで、斎藤喜博さんの周りに授業を熱心につくる教員と、それと一緒にやるという研究者とがいっぱい集まってきたんだと思います。

教授学研究の会というのは、それをもとに年に１回集まって、実践報告をしたり、研究をしたりする。まあ今から思えば実践報告をしたり研究をしたりというけど、斎藤さんを中心にする会で、斎藤喜博さんのいわば審美眼で見たものに対する批評であり、指導であるということで、一方では斎藤喜博さんには教授学という学問にできないかという思いはかなり強くて、稲垣忠彦とか吉田章宏とか私とか、そういう人達を引きつけてやっていきたいという気持ちが強かったと思うんだけど、後から思えば稲垣さんなんかにはもっと広い授業研究というようなものを考えていたり、あるいはそれが体質であるのに対して、斎藤喜博さんの方はやっぱり自分を中心にした授業研究みたいなものの方が非常に強かったということになるわけですよね。

４．林竹二の斎藤喜博批判の真意

結局きっかけは、斎藤喜博さんが教科研なんかから離れちゃった後、斎藤喜博さんが孤立しているところで、一番支えになっていたように見えた林竹二さんが、斎藤喜博批判と言ったらいいんだろうか、教授学研究の会批判というのをやることになって、これは林竹二さんにしてみれば、そういう意図があったんじゃなくて、林竹二さんの気持ちが変わったのは、いわゆる同和教育を中心にしていた兵庫の湊川高校に招かれて行って、そこで斎藤喜博さんの授業研究とは違うものを見たというか、感じるようになって、こっちの方が本物だという気持ちが非常に強くなっていったというきっかけがあると思うんですね。

だからそれは、林竹二さんの方を調べればわかりますが、昭和 52 年、1977 年の教授学研究の夏の公開研究大会、片山津というところでやった時に、林竹二が後で自分で「留別の講演」というふうに呼んでいる、自分は違う道を歩むことになるからと、こういうふうに言う講演をやって、ある種、斎藤喜博批判じゃなくて、林竹二さんは後で私にデコレーションと言ってたけど、まあ斎藤喜博の周りにいる実践家とか研究者に対する批判が強かったようですけどね。

でも、それがものすごいきっかけになっちゃって、林竹二さんの真意とは別になって、稲垣さんが離れていく。斎藤さんの周りに集まってくる人たちが離れていくというふうにして、宮教大なんかの場合にはたくさんそういう運動に加わっていたわけだけど、みんな林さんの方についていくという格好になっちゃった。人間的に見ると、そりゃあ林竹二の方が非常にいいんですよ。斎藤喜博さんという人は、実践家であると同時に孤立しながらやってきた人だし、ある意味で自尊心というのか、自信の非常に強い人だから、本当に神がかり的についていくというのでないとやっぱり嫌だという気持ちが強くなってくるんだろうと思うんですね。

また、そういう感覚だけで言ってるんじゃなくて、やっぱり誰かが、現場教師の授業したものを指導者が指導しちゃうということに対する不満がものすごくあって、もっと授業を多角的に研究しなきゃあいけないんじゃないかというふうなのが稲垣さんたちには非常に強くあったと思うし、吉田章宏さんなんかも同じではなかったかもしれないけれども、やっぱり同じだったんじゃないかという気がしています。

だから、その時はいろんな人間関係で別れたり去ったりしていたんだけれど、後から思えばやっぱり斎藤喜博の授業づくりというものがやっぱりものすごく価値があるんだ、斎藤喜博が好きだとか嫌いだとかいうことじゃなくて、というのと、やっぱり授業というのは一つのやり方ではなくて、多様なやり方があるので、そういうものを持ち寄って研究するのがいいんだという考えの違いだったんだと思いますけどね。

私はまだ 40 代に入りかけていたぐらいだし、宮教大のいろんなこともやっていたし、相当迷いました。林竹二は意外なぐらい斎藤喜博批判ではない、まあ斎藤喜博批判がないわけじゃないんだけど、むしろ斎藤喜博の仕事は大事だと、林竹二はある時期、「斎藤喜博の仕事を支えて理論化しようと思ったけれども、もう自分は違う道を進まなければいけなくなった、いわば同和教育の人達と一緒に進んでいかなきゃあいけなくなった」と言って、「私はもうその仕事はできないから、横須賀さん、あんたがこれからは斎藤喜博を支えて、斎藤喜博の仕事を理論化すべきじゃないか」と私個人には助言するんですよね。これはあまり人には言ってないんだけど。

５．教授学研究の会の再建へ

そんなことで私自身は迷ったけど、一方ではやっぱり稲垣さんなんかの言う、広く授業を、どんな授業でもいいから集めて、集めてというと悪いけど、それについて広く研究しようという考えにはどうもなれなくて、私自身の個性なのかもしれないけど、やっぱり斎藤喜博のつくる授業、あるいは斎藤喜博の周りにものすごい実践家が何人かいたわけですが、そういう人たちのつくる授業の本物性というものにどうしても魅かれてしまう。やっぱり私は、そこにあるものが何なのかというのを見極めないと、広く授業の研究をするという気には到底なれなかったということがあります。

それで結局、教授学研究の会の再建のような形に私がなっていく。そうすると、どうしてもキャリアとか何から入って中心になっていくというふうになってしまうんですけど、同時に私は斎藤喜博さんがやっているのと同じような学校の校長に招かれて行って、そして個々の授業というよりは、学校づくりというふうに言うんでしょうか、学校を変える、その中で授業の意味が見えてくるというような仕事の方が魅力的に見えて、それをやるようになっている人たちは何人か私と同じように斎藤喜博さんの周りにいて、大分大の野村新さんとか都留文科大にいる箱石泰和とか、そういう連中ですが、だから授業研究というよりも学校に入って学校づくりをやる、そこで教師の成長も起こるし、いい授業も生まれてくるというふうに考えるようになった。それで私は主に東北の一関の本寺小学校とか、青森の戸山中学とか、あるいは六戸町の七百中学とか、主に私は岩手県とか青森県の学校に招かれて入って、大体短かければ３年ぐらい、長ければ５～６年そこの学校で教師たちと一緒に授業研究を中心にする学校づくりをやるということになってきて、それが私にとっては一番魅力のある仕事になりましたね。

結局、いまも続けているのはそういうことで、授業の結果を持ち寄って、それを研究するというよりは、学校に直に入って、そこで授業と表現活動を教師たちに指導をしながら、学校そのものを活性化させていく、結果的にはそういう仕事になりましたね。

６．授業づくりを核にした学校づくり

いまでも自分が授業するというのも、そういう学校づくりのプロセスの中で、必要だったら自分で授業してみせますということです。林竹二さんのように自分が授業することに自己目的をおくということではなくて、必要な場合はやりますというふうになってきているんですけどね。最近は神奈川県の横須賀市の森崎小学校なんていうところは、もう10年通っていて、この間、小さな公開に行って、私が一番この学校で古くなっちゃったと笑ったんだけど、みんな異動して転勤してしまって、私が一番長くなってしまう。

それから沖縄の那覇の宇栄原、あの辺ではウエバルというふうに呼ぶようですが、学校の名前はウエハラ小学校、ここは沖縄にただ一人の民間人校長で横山芳春という校長が、環境教育をやりたくて民間人校長に志願してなるんですけど、研修期間の間に斎藤喜博全集を見つけて読んじゃうんですね。そうするともう斎藤喜博の魅力にとりつかれて、これでやりたい、だから来てくれ、来てくれ、来てくれと言って、学長をやっていた時期だったのですが、結局、３年あの宇栄原小学校に通いましたがね。

渡邉　まだ続けられているんですか。

横須賀　ところが横山校長が転勤になった。転勤しないで長く続けるようにいろいろ応援したんだけど、成功しないで、それで今度はいま話題になっている宜野湾市の長田小学校の校長に転勤になって今年から行っていて、それでもう早速始めているんですよ。宇栄原小学校の時は民間人校長として入って、ものすごい抵抗を受けて追い出し策動までやられたぐらいで、それを乗り越えたので大変な人だと思うんだけど、今度はもう最初から受け入れられていて、だから来てくれ来てくれと言われて、まあ様子を見ながらと思ってついこの間行ってみたところですけど。まあまだまだこれからですけれども。

まあそんなことで、私は斎藤喜博さんに会って、もちろん昔から知ってはいるんですが、直に接するようになったのは宮城教育大に行ってからで、その授業づくりの魅力、授業というより授業と表現活動を核にした学校づくり、あるいは教師の成長、それを実際に図るという仕事そのものに興味を持ったし、自分のやれる仕事が見えて、結局、それを細々と続けてきたということだと思います。

だから授業研究というのを学問的に科学的にやるというのは難しいですね。難しいというより、本当に意味があるんだろうかと私には非常に思えるようになってきて、まあ心理学の立場からとか、ヴィゴツキー理論を使ってとか、いろいろ出てくるけど、ちょっと私にはそういうことの意味がとらえられない。むしろ学校に入って実際に授業をしている先生たちで、新任で何もわからないようなものや、50代に入って何も改めて考えなくても授業なんかできちゃう、そういう教

師にどういうふうにもう一度授業に立ち向かう気力とか認識とか、そういうものをつくっていくか、助言をしていくか、それがまた本当にそうなって変わっていくところが私には非常に興味津々です。それは学校の中ではかなりきついことを言わなきゃあいけない時には言いますし、そうしながら教師と一緒に運動靴を履いてやっているということにすごく意味を見てるということですけど。

その中でやっぱり子どもがものすごく変わってくるというのが一番魅力がありますね。教師が変わっていくということは、子どもが変わっていくということだし、子どもが変わっていくと教師が変わらなきゃあいけなくなってくる。だから、もうあとは定年を待つだけというような50代の女教師でも、学校が動いてくると、活発になってくると、子どもがやっぱり変わってくる、それは昔のまま、前のまま対応してたんじゃあもう生きていけないような状況が出てきますね。そういう状況の中でやっぱり教師自身が変わるというか、自分の可能性がもう一度出てくる。やっぱり子どもは本気になった時は美しいですよね。結局この魅力でここまでやってきたような気がしているんですけど。

だから思えば、生活綴り方も文章を通してということだけど、子どもの魅力そのものがもう一つよく見えない、まあ林竹二さんなんかは作文、感想文を通して子どもの魅力を読み取ることをしていたわけですけど、私には非常に間接的に見えるし、それから授業記録を持ち寄ってというのも、私には、研究的ではあるのかもしれないけれども、子どもが見えないし、子どもの変わっていくところが見えないという点ではちょっと魅力がもてない。やっぱり教師と子どもが変革、変わっていくところに立ち会うという魅力を追い続けてきちゃったということですね。

その間に私なりには、授業をつくる原則みたいなものが随分見えてきました。発問というふうなものがどのような役割を果たすのかとか、発問のつくり方とか、そういうことによって随分甘い授業みたいなものがきちっと引き締まってくるかとか、そういう教師に対する助言になるような授業のつくり方については、私なりに見えてきたなと思っていますが、もう最新の研究なんていうものにはならないですから、学会的な活動からはもう引いてしまいましたけど。

7．戦後の教員養成批判と改革

もう一方では、ずっと教員養成のことについて、あまりにも戦後の開放制と学芸重視というものが実質的にできてないということを批判し続けてきて、最初のうちはほとんど師範学校復活論者といって名指しで批判されるようなことをやってきましたけど、最近、ここ10年ぐらい随分風向きが変わって、横須賀の言ってたことがそのとおりだったんだということで、いまの教員養成改革に結びついてきましたけど。

渡邉　私も同じような気持ちで新構想大学に期待したわけですが、兵教大も途中から新構想が新構想でなくなりつつありまして、そこで梶田叡一学長にかけていたんですけど。

横須賀　私も宮教大を新構想の大学のようにしたかった、いや新構想を超える大学にしたかったんだけど、やっぱりあるところまでで挫折をしてしまう。それは本当に学内政治みたいなもので負けてしまうわけですよね。圧倒的多数の教科の専門家に、保守性に負けてしまう。それに新教育大と言っていたところも、本来のやるべきところをやらないで、博士課程に走っていってしまう。梶田さんが学長になってから梶田さん自身に愚痴られたけど、ギリシャの何とかの時代の何とかかんとかだというのばっかり集まってきて、本当の教育のことがわかってない、何とか変えたいんだと言っていたけど、梶田さんもそれなりの仕事をしたわけだろうけど、やっぱり本当には変えられなかったのかななんて見てますけどね。

渡邉　自分でそういう大学をつくる以外にないのかなというような、そういうお気持ちじゃないかと思います。

横須賀　それはそうでしょうね。私だってそうですけど、とてもとてもそんな力はないし、梶田さんのような人脈もないし、まあこういうところ(十文字学園女子大学)にたままた小学校教育養成課程ができるからと言って呼ばれてきたんですけど、いま改革の仕事を頼まれていて、ちょっとだけ最後の仕事をしようと思っているところですけどね。

8．地方教育委員会の保守性・派閥性

渡邉　私もこの聞き取りを始めるにあたって、学校現場からの改革ということ、教育改革は学校現場をベースにすべきだという基本的な考えがありますので、そういう中から苦労されて、その路線で来られた先生方の声を聞こうと。それでいま授業研究、教育研究がどこかへ追いやられたような状態ですが、これを何とかまた復活するという芽があるのかどうか、どうすればいいのかということ、その課題展望がありまし

たら、お教えいただきたいと思います。

横須賀　いろんなことがあるけど、たまたまそこの、私がいま言ったような校長、志あるということで、私や他のものが、まあこの頃他のものも減ってきているんだけど、私が加わってやると、学校が間違いなくよくなるんですね。それで地域の親たちがものすごく喜ぶんですよ。宇栄原小学校なんてまさにそうですから。教師たちは最初のうちは追放運動を始めて、教育委員会に駆け込んだりするわけですが、親たちは校長をかばって助けた。去る時は本当に親が惜しんだし、この間、私が長田小学校の方に行くので、でも一度だけ宇栄原の人達にも会いたいと思って会食に来てもらったんだけど、そうするとＰＴＡの会長からわざわざ電話をかけてきて、「先生、本当にありがとうございました」と言うんですよね。結局、私は問題は教育委員会だなと思っているんですよ。

地方教育委員会の保守性、派閥性というお話ですが、問題をどういう言葉でとらえるのが適切かどうかは大事だと思いますが、そこが変わらないと、学校が一つよくなっても、それが横に広がっていくということはないですよね。だからいま、政治課題では地方分権とか言って、地方に地方にと言ってますけど、いまのままの教育委員会で地方に分権したって、地方に財源や何か移したってだめなんじゃないかなという気がしますけどね。だから、こういうことをしていると、文科省なんかの方がはるかに理解してくれるし、応援してくれるんですよね。地方へ行くと、もうそれを広がらないようにするという圧力の方が強くなってくる。ここが変わらないと日本の子どもたちは本当に不幸ですよね。学力向上だって、本当にはできないし、というのが私の実感ですね。

宜野湾にいらっしゃったら、ぜひ長田小学校の横山芳春さんを訪ねてみてください。志のある快男児ですよ。特定の主義主張ということよりも、子どもの可能性を引き出して、いい学校をつくってみたいという、それだけをやっている純粋な校長で、応援したいと思っているんですけど。

渡邉　私は長年、「日本教育新聞」の記者をしてきましたが、そういうところにスポットを当てるのが記者の務めだと思いますね。

今日は、貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。